

自由論題 4「中国の対外政策」・報告 2

報告テーマ

中国における海洋意識の形成  
“Constructing Maritime Consciousness in China”

氏名(所属)

毛利 亜樹(筑波大学)

要旨(800字程度)

本報告では、中国における「海洋意識の向上」を謳う言説を分析することで、どのように海洋が政治空間として意識化され、ナショナリズムの対象として作り上げられているのかを検討する。世界的に急増している中国の海洋政策を扱う先行研究では、海洋空間と資源をめぐる中国の対外戦略や対外関係の分析が大半を占めている。中国の対外行動をその地政学的計算と能力の反映とみなすこれらの研究は、海洋における主権と管轄権の拡大を中国の国益として想定し、その国益観の形成過程をあまり問題にしていない。しかし、現実の中国では、1980年代以来、「海洋意識の向上」が課題とされ、政治空間としての海洋を人々に認識させようとする試みが続けられてきた。そこで本報告は、先行研究では問われてこなかった、中国の「海洋意識の向上」言説を検討することで、海洋空間がどのようにナショナル・アイデンティティや主権のパフォーマンスと結びつけられているのかを明らかにする。本報告は、社会的構築物としての領域性(territoriality)の知見を意識し、中国の海洋認識を分析する試みである。

報告では、第1に、領域性(territoriality)の研究群が、中国における、海洋空間と資源と統治(人)とを結びつける人為的な取り組みの分析に、どのように役立つのかを整理する。第2に、中国の学術誌やメディアに現れた「海洋意識の向上」言説の大まかな傾向を捉える。そのために、海軍近代化と海洋政策整備の議論が再開、本格化していく1980年代から2010年代までの関連文献やテレビ番組を検討する。これにより誰が、誰に向け、どのような論理で「海洋意識の向上」を強調しているのか、中心的なパターンとそのヴァリエーションを抽出する。第3に、「海洋意識の向上」言説と、中国政府の海洋政策や愛国主義教育の展開、近隣諸国との海洋における緊張との関連を考察する。これらを踏まえ、第4に、作られてきた中国の「海洋意識」が持つ含意を議論する。